

# 『ブヴァールとペキュッシェ』を読む (一)

中 條 屋 進

《8月1日土曜日に、とうとう『ブヴァールとペキュッシェ』にとりかかります。そう自分に誓ったのです。もう後戻りはできません。それにしても、なんと恐怖、なんと不安でしょう！ 私は、どこか誰も知らない土地に向かってとても大きな旅に出ようとしていて、そしてそこから二度と戻ってくることはできない、何かそんな気がしています。》<sup>1)</sup> ついに未完のまま残されることになるフローベール最後の小説と作者自身の、その後の運命を不思議と正確に予言する手紙である。その予告どおり、1874年8月1日午後4時、《午後中続いた拷問の苦しみの末についに見つけた》<sup>2)</sup> 冒頭の一文で、この《二匹のわらじ虫》<sup>オデッセー</sup>の知的冒険譚、《笑劇仕立ての批判的百科全書》<sup>3)</sup> はその幕を開く。

## 第1章 序章

《33度もの暑さだったので、ブルドン大通りはまったく人けがなかつ

- 
- 1) 1874年7月29日、ツルゲーネフ宛。フローベール書簡集からの引用は、1875年までは Pléiade 版、1876年以降は Club de l'Honnête Homme 版による。
  - 2) 1874年8月1日、エルネスト・コマンヴィル宛。
  - 3) 《二匹のわらじ虫の物語》はフローベールの初期のシナリオに見られる題、あるいは副題。《笑劇仕立ての批判的百科全書》は1872年8月19日デ・ジュネット夫人宛の次の手紙——《私はいま、何年もかかりそうな作品にとりかかろうとしています。出来上がったら、時期を見計らって『聖アントワヌ』と一緒に出そうと思います。手当たり次第にものを書き写す二人の人物の物語、笑劇仕立ての批判的百科全書のようなものです。》下線部の原文は次の通り。C'est l'histoire de ces deux bonshommes qui copient, une espèce d'encyclopédie critique en farce. 従来版では qui copient の後のヴィルギユルがなかったので《二人の人物が笑劇仕立ての批判的百科全書のようなものを書き写す物語》と訳されてきた。

た。

下手には二つの水門に堰かれたサン＝マルタン運河が、インク色の水をたたえて一直線に延びていた。その真ん中に木材を満載した一艘の舟、そして堤の上では大樽が二列に並んでいた。

運河の向こうには、建設資材置場でところどころ隔てられて立ち並ぶ人家の間に、澄んだ空が群青色の板のようにくっきりと浮き出していた。そして、日光の照り返しのもと、家々の白い壁とスレートの壁、そして花崗岩の河岸がまぶしく光っていた。遠く漠とした町のざわめきが生あたたかい大気の中に立ちのぼっていた。

二人の男が現れた。》<sup>4)</sup>

『ボヴァリー夫人』冒頭のあの代名詞とシャルルの帽子の描写を初めとして、フローベールの作品は確かに、その文のひとつひとつが、読む者の多様な解釈を誘うようにあえて仕組まれている感がある。そこからフローベール作品の解釈を巡る膨大なディスカールが生まれ、しかも、昨今ではフローベール論の《紋切型辞典》を作ることが流行りになりだした気配すらあるほど、その多くはすでに決まり文句と化した言葉に溢れている。今日フローベールの作品について語るということは、作者が恐らく張りめぐらしている罫に絶えず注意を払いつつ、その一方で、そうした紋切型の批評の言葉に無意識に頼ることをも極力避けつつ進めなければならない、実に困難な、苦しい業なのだ。少しでも楽になるには、できるだけ多くフローベール自身の言葉にしゃべらせるにしくはない。その果てに見えてくるのは、ブヴァールとベキュッシュと同じコピストとして作品を敷き写す、われわれ自身の姿である……。

それにしても、何故33度なのか？「非常な暑さだったのだから」あるいは「まれにみる猛暑のせいで、ブルドン大通りは……」では何か足りない

---

4) 『ブヴァールとベキュッシュ』からの引用は原則として Le Livre de Poche 版 (1999年) による。

のだろうか？ 薬剤師オメーの奇癖を思わせる、細かな数字への異常なこだわり。それに、人けのない通りを表現するのに *absolument* (絶對的に) *désert* (砂漠のような) とは、やや大げさに過ぎはしないか？ 《二人》のスピストの物語の冒頭でまず目につくのは2という数字だ。二つの3<sup>5)</sup>、《二つの水門》《二列》の大樽、現れる《二人の男》。奇妙な透明感と緊張、そしてそこはかたない倦怠の気を孕んだ《砂漠》に、同時に現れたその二人は《同時に同じベンチに *à la même minute, sur le même banc*》腰を下ろす。2という数字の氾濫と、同じという形容詞の強調。二つのものは……同じ？

二人はそれぞれ帽子を脱いで脇に置く。(またもや帽子だ!) すると二人とも帽子の裏に自分の名前を書き込んである。ブヴァール、ペキュッシェ。《おや、私たちは同じことを思いついたんですね》と会話が始まり、二人とも同じ勤め人であることが分かってたちまち意気投合。両主人公の運命的な出会いがこうして完了し、彼らの物語が紡ぎだされる。二人とも筆耕を職とし、年齢も同じ47歳、しかも独身(ブヴァールはやもめ)。小説冒頭のこの出会いの時は、(後の遺産相続の日付から逆算して) 恐らく1838年の夏だろう。大柄で外向的なブヴァールに対して、ペキュッシェは小心者の小男。《2》と《同じ》という言葉に包まれて登場しつつ、肉体的にも性格の点でも対照的なこの二人は、しかしこの後、この滑稽な対照性と奇妙な相互補完性を保って、最後まで一对の存在として描かれ続ける。一枚の紙の表と裏、あるいは双頭のカンディード？ とにかく、この最初の出会いの日に成立した、彼らの間の何事も壊すことの出来ない友情こそは、失敗の連続から成る彼らの生におけるほとんど唯一の明らかな勝利であるには違いない。

ブルドン大通りのベンチで始まったこの日の会話は、その後レストランからカフェ、ペキュッシェのアパルトマンからブヴァールのそれへと

5) 「22度もの……」とできたならば作家にとって理想的だったのではないか。

延々と続き、その長い会話の中で、2章から10章までの小説の本体で扱われることになる多くのテーマが、それとなく予告されている。《田舎はさぞいいでしょうね》というペキュッシュの詠嘆に続いて、二人の座るベンチの前を、まず一人の酔っぱらいが、次いで結婚の行列、売春婦と兵士のカップル、最後に聖職者が通り過ぎる。その都度ブヴァールとペキュッシュは、労働者と政治について、恋と女について、宗教について会話を交わし、そのそれぞれが第6章、第7章、第9章の主題への準備となっている。レストランでは、ペキュッシュが薬味を使うのをこわがるのをきっかけに医学が話題となり、《それから二人は科学の効能を讀えた。知らなくてはならないこと、研究すべきことがどんなに沢山あることか！ 時間さえあれば！》ここには、二人が初めから歴史と文学に興味を抱いていることも書き込まれており、こうして第2章以降の小説の内容の予告と準備は整った。残るは彼らにその《時間》を与えることだけだ。そこで、一対の存在となって以来、次第にそれまでの単調な生活が耐え難いものとなってきていた兩人に大僥倖が降って湧く。《1839年1月20日》ブヴァールが《伯父》(実は父親)の遺産を相続できる旨の知らせが届く。この相続を巡るごたごたが片づいて最初にブヴァールが発した言葉は《一緒に田舎に引っ込もう！》ペキュッシュは《自分の幸福に友をも結びつけたこの言葉をしごく当然のこのように聞いた。何故なら、この二人の結合は絶対的な奥深いものだったからである。》二人が結局ノルマンディの(架空の)村シャヴィニョルに引っ越すまでの2年間は、田舎の生活への準備と二人の夢に費やされる。《雲雀のさえずりで目を覚まし(……)牛の鳴き声や干し草の匂いを楽しもう。(……)木靴を履いたまま食事をしよう！「(……)髭も伸ばそうじゃないか！》詩的なものと散文的要素の奇妙な混淆。そしてそこから生まれる滑稽味。そう、われわれが読んでいるのは《笑劇》なのだ。われらの両主人公が誘う笑いはどことなくグロテスクではあるが。彼らは、ルーヴル美術館ではラファエロの絵に《夢中になろうと努め》、国

立図書館では《蔵書の正確な数》を知りたいと思うのだ。

1841年3月の末、これも奇妙に滑稽でグロテスクな9日間(1)の旅の末にシャヴィニョル着。《ほら、にんじんだ! やっ、キャベツだ!》と畑の野菜の名を呼んではいしゃいだ後、窓から射し込む月の光を浴びていびきをかく二人の姿で第1章が終わる。

## 第2章 農業(園芸・気象学・果樹栽培・造園・果実酒と缶詰製造)

翌朝、目覚めた二人の喜び。さっそく小作人の案内で自分たちの土地を見て回る。二人がまず手がけるのは園芸。これはなんとか良い結果が望めそう。ならば農地の耕作でも成功できるに違いない。土地の貴族ファヴェルジュ伯爵の農園を見学し、管理の行き届いたその経営に敬服する。ここでいよいよ彼らの読書が開始される。本に書いてあることをただちに実地に移そうというのである。小麦で最初の失敗。二人は仕事を分担する。ベキュッシェは園芸、ブヴァールは畑。ところが、ベキュッシェは野菜、メロン、様々な花の栽培にことごとく失敗。《こっちの本あっちの本を調べてみるのだが、埒があかなかった。本によって意見がまちまちなのだ。》農業のためには気象学の知識が必要だというわけで、専門書の分類に従って雲の研究。しかし《雲の形はその名前が見つからないうちに変わってしまった。》家畜飼育、ビール造り、すべて失敗。一方ブヴァールは、農業専門書の説くところと正反対に、小麦畑に《石灰を散布》し、《二度鋤きの手間を省き》、あざみの除草も遅きに失したにもかかわらず、《その翌年》小麦の豊作に恵まれる。ところが、それをいくつもの塚に積み上げて、本で知った新方式の醗酵法を試みると、塚は一斉に火を吹く。深い悲しみ、落胆。しかも莫大な損害。彼らは耕作はあきらめて、今後は《果樹栽培を専門にやる》ことにする。ひねもす働いたおかげで多少の収穫は期待できた。そこへ大嵐の来襲。果樹園は目も当てられぬ惨状を呈する。書物についての最初の疑念がここで現れる。本の忠告通りにしてもうまくいかず、

### 『ブヴァールとペキュッシェ』を読む (一)

かえって何の手もかけない木がなかなか味の良い実をつけるのは、一体どうしてなのか。《どこに法則があるというんだ? (……) 果樹栽培術なんていんちきだね》と言うペキュッシェに、《農学だってそうさ》とブヴァールが応じた。

しかし、荒れた庭を修復する必要と、たまたま二人の《蔵書》に含まれていた一冊の本が、彼らを今度は造園術の実践へと導く。この本にあった様々な様式を折衷した奇想天外な庭園が出来上がると、《あらゆる芸術家と同じように》、彼らもまた世間の喝采を浴びたいという欲求にかられ、シャヴィニヨル村のお歴々を招待して宴会を催す。今度の失敗は、人々の無理解という形をとって二人を襲う。料理と、特に彼らの自慢の庭に対する招待客たちの酷評。《人との付き合いに嫌気がさした二人は、これからは誰とも会わず自分たちだけで生きようと決心した。》そこで自給自足、貯蔵食糧の自家生産の試み。ところが、缶詰類はすべて腐って悪臭を発し、既存のどんな果実酒をも凌ぐものにしようと様々な香料をごたませに注ぎ込んだ《ブヴァリーヌ》は、蒸留器の爆発で危うく二人の命を奪うところだった。こうした不幸続きの原因について、章の最終行でペキュッシェが結論を下す。《それは恐らくわれわれが化学を知らないからだ!》

こうして、ひとつの分野での失敗が、ただちに、別の新たな「知」の一分野の探求へと二人の主人公を駆り立てる。作品全体を支配する、仮借なき、反復と継起のメカニズムである。

### 第3章 自然科学 (化学・解剖学・生理学・医学・薬学・衛生学・天文学・動物学・古生物学・地質学)

《単体<sup>6)</sup>は恐らく化合物である》というある化学書の記述に始まって、倍数比例から等量の法則まで、化学は (恐らく作者にとってと同様に<sup>7)</sup>) 二

---

6) 化合物の対概念。

7) 《私はいま化学の本を読んでいます (さっぱり理解できませんが)》。1873年

人には理解不能の事柄に満ちており、ヴォコルペイユ医師訪問をきっかけにして、二人の興味の対象は早々に次の医学へと移っていく。まず人体模型を一体購入して解剖学の実習。雇っている老女中の口を通して、彼らが本物の死体を隠匿しているとの噂が広まり、村長は知事への告発を仄めかす。「**「なんたる国だ！ これほど馬鹿げた、野蛮で遅れた国があるものか！**」二人は自分たちを他の連中と比べて自ら慰めた。学問ゆえの苦しみ、それこそは自分たちの望むところだ。》しかし、この模型による解剖学の実践ほど、彼らの《学問における方法の欠如》<sup>8)</sup>をよく示すものはない。心臓から胃へ、耳から腸へ。彼らは行き当たりばったりに次々と器官をいじくってはすぐに放り出し、たちまちこの厚紙製の人体への興味を失ってしまう。医師の挑発的なひと言が、彼らを今度は生理学へと駆り立てる。味覚の中樞が舌にあり、空腹の感覚は胃にあるという《ありきたりの知識》を得て大いに喜び、二人はいかにも《笑劇》にふさわしい実験を次々と繰り広げる。皮膚に湿り気を与えるだけで本当に喉の渇きが鎮まるかどうかを確かめようと、濡れた服を着て通りを走り回って風邪を引き、次いで、人体からは絶えず水蒸気が発散しているという説を検証するために裸で秤台に乗っているペキュッシュの傍らで、ブヴァールはぬるま湯を張った桶の中で懸命に胸と腰の筋肉を動かす。これも、本に書いてあった通り、水中で筋肉を運動させれば水温が高まるかどうかの実験だったが、温度計の目盛りは下がる一方。そこへ迷い込んできた犬が怖くて二人は裸のまま震えるばかり。ようやくこの犬をつかまえて実施した残酷な実験も、犬を血まみれにするだけの結果に終わる。ここで閑話休題——生殖の研究に際し、ペキュッシュは52歳の現在もなお童貞であることを告白。結局、様々な書物間の矛盾撞着から彼らが引き出した結論は、生理学は《医学の小説だ》

---

2月3日、ジョルジュ・サンド宛。

8) 《この本に副題をつけるとしたら「学問の諸分野における方法の欠如」とでもなるでしょう。要するに、私は現代思想を逐一検討しようという抱負を抱いているのです。》1879年12月16日、テナント夫人宛。

というものだった。(ただし《理解できなかつたので彼らにはそれ〔生理学〕を信用できなかつたのだ》と続く。) たまたま出会った行商人から押しつけられた医学書をきっかけに、彼らが村人相手の医療の実践に手を染めるに至って、ヴォコルベイユは医師法違反の廉で訴えると二人を脅す。シャルル・ボヴァリーの奇形足手術を思わせるグロテスクな失敗の連続の中で、隣のボルダン夫人の頬の斑点の治療のみには成功。手当たり次第に医学書を読み漁ったせいですっかり《頭が混乱》し、急に、自分の健康がやたらと気になりだした二人は、次に衛生学と食事療法に関する読書にのめり込む。しかし最初に手にしたマニュアルでは、彼らの好物がことごとく禁じられている。そればかりかあらゆる食物・飲料が健康に有害で危険とある。肉も魚もコーヒーも朝の生水も、ベキュッシュの人格そのもののような庇帽までも。ところが他の著者によれば、豚肉は栄養満点、煙草は完全に無害で、コーヒーは《軍人には欠くべからざるもの》とあった。結局、様々な書物の主張の間の矛盾は、この分野でも他の科学に劣らず甚だしい。《では一体、衛生学とは何なのか? 「ピレネーのこちらでは真実でも向こう側では誤り」とレヴィ氏は断言し、それに加えてベックレルは衛生学は科学にあらずと言っている。》この言葉に接して二人は食事療法を喜んで放り出す。《享樂あってこそその人生ではないか。》こうして節制は元の木阿弥。存分にそれぞれの好物を満喫する享樂の一夜。その夜眺めた満天の星が、二人を今度は大自然の研究へ導く。

最初に天文学。『聖アントワーヌの誘惑』第6章、悪魔の翼に乗ってアントワーヌが無数の星辰の間を飛翔する場面を思い起こさせる二人の会話の中に、書簡集に読み取られる作家自身の信念が、さりげなく、ブヴァールの科白に託して示されている。《科学なんて空間のほんの片隅から得られたデータに基づいて出来ているものなんだな。してみると、われわれの知らない残りの部分、もっと大きい、われわれの目の届かない世界には通用しないのかも知れない。》<sup>9)</sup>しかし、二人の関心は宇宙の成り立ちからた

ちまち動物学へと移り、異種動物間の交尾を巡るいくつかのグロテスクな実験を経て、ペキュッシュの友人デュムシェルからの手紙に触発された二人は、今度は考古学・古生物学・地質学関係の読書に熱中する。化石採集のために、ノルマンディの海岸への数次にわたる調査旅行を敢行。最後にはフェカンにまで足を伸ばす。この最後の旅を挟んで、その前後に、我らの両主人公の知的発展の明確な証となり得る二つの文が存在する。旅の前には《丘という丘は二人にとって大洪水の証拠だった》。つまり、高台で海の生物の化石が見つかるという事実は、「ノアの洪水が本当にあった証拠である」<sup>10)</sup> という一般通念を、二人が村のジュフロワ神父と共有しているということに他ならない。しかし、この旅からの帰途ふと目に留まった新聞記事が契機となって、人類の登場とノアの洪水をフィナーレとする夢幻劇のような、地球の進化に関するジョルジュ・キュヴィエ等の古い学説に対する疑念を呼び覚まされた彼らは、ついにはラマルクとジョフロワ・サン＝ティレールの進化論を知る。それは《一般通念 *idées reçues* と教会の権威に逆らうものだった。ブヴァールは軛を解かれたような安らぎを覚えた》。物語の開始以来、その言動がまさにその《一般通念》の権化のようだった彼らを、作家は、その死によってついに未完に終わった小説の第二巻では、あの『紋切型辞典』の編纂者とする予定だった。《一般通念》の化身からその批判者へ。果てしなき反復、出発点への永劫の回帰、あるいは無数の円環が織りなす螺旋の構造を有するかに見えるこの作品中には、しかし確かにひとつの大なる進化がある。ただし、その進化は決して直線的ではなくまた明確に描かれることもない。科学の説く“真理”の相対性、その限界に関する自らの信念を主人公の科白に託したその直後に、作家は二人に顕微鏡を与えてその無能ぶりを極度に戯画化する。(彼らは顕微

9) この科白に続いて、二人はアントワヌと悪魔が交わす会話と同じ言葉を繰り返している。《「こうしたものすべての目的は何なのだろう?」「恐らく目的などありはしないのさ」悪魔の科白に「恐らく」はない。

10) 『紋切型辞典』“化石”の項。

鏡操作の初歩的なミスのために器械を狂わせ、何も見えないからといってこれを売った店の悪口を言い、果てはこの器械の効能とそれに負っているという科学的発見の信憑性を疑う。) ここにあるのは、その没個性的処女作で《自らのうら若き男女の主人公をからかう前代未聞の本》<sup>11)</sup> を実現しつつあることの誇りを高らかに語った作家とその手法の、極限の姿である。しかしともかく、ここで少なくとも一つの《一般通念》から開放された我らの両主人公は、大洪水と人類の起源を巡ってジュフロワ神父と論戦を繰り広げ(第9章で展開される「科学」と「宗教」との出口のない永遠の対話の第1幕)、その後、とある民家で遭遇したルネサンス時代の長持を契機として新たな知の冒険に乗り出していく。

#### 第4章 考古学と歴史(中世の教会と城砦建築・ケルト考古学・陶磁器・フランス史・歴史哲学・記憶術)

《半年後には彼らは考古学者になっていた。彼らの家はまるで博物館のようだった。》いきなり半年もの時間が経過して第4章が始まるのは、彼らの《博物館》がすでに非常な量的充実を呈することの理由を説明するものか? 歴史が主題となる後半部に対して、考古学に充てられた前半は物で溢れている。恐らくはその半年間に収集されて今、博物館を埋めている珍奇かつ雑多な物の数々——太い鉄鎖、石桶、瓦の破片、壺、ガラス瓶、鎖帷子、矛槍、二枚の肖像画、二個のココヤシの実、梨の入ったブランデー瓶、聖ペテロの像、その足元のバター壺……。章冒頭のナレーションでは名指しされるだけのこれらの品々の由来の説明は、後に村のお歴々がこの博物館の見学に訪れる際に、両主人公によって断片的になされることになる。鉄の鎖は地下牢で囚人をつないでいた、瓦は昔の蒸し風呂に使われたもの、石桶は墓石の名残り、壺に入っている土は人の亡骸を焼いた灰で、

---

11) 『ボヴァリー夫人』第二部冒頭のエンマとレオンの会話に関して、1852年10月9日、ルイーズ・コレ宛。

古代ローマ人はその壺を眼に近づけて涙を注いだ……。しかしその真偽のほどは？

この章ではすべて「物」を中心にして事が運ぶ。前章末尾で登場した《ルネサンス時代の長持》に触発されて考古学的探索とあらゆる時代物のがらくた収集に乗り出した両主人公は、教会の墓地に埋もれた石の器を発掘、それをドリユイド僧の使った《聖水盤》と信じてひとしきりケルト考古学に熱を上げ、夜陰に乗じてその聖水盤を盗み出す。その返還を神父に迫られた二人は司祭館で見かけた由緒ありげな《スープ皿》との交換に応じ、そのスープ皿が彼らを今度は陶磁器の収集へと向かわせる。同じ骨董趣味を持つ公証人マレスコにそのスープ皿の値打ちを否定され、ベキュッシュは怒りに任せて皿を割ってしまうが、真偽のほどは結局分からない。これは本物で、逆にマレスコがほめる風だった他の陶器の方こそみんな偽物なのかも知れない。ならば、ケルト学が古代ガリア文明の遺物と称するものにしても同じことではないのか？ このくだりにおけるこうした一連の「物」の描かれ方はいかにも意味ありげである。物 [=現象] の氾濫。個々の事物に何らかの意味を付与し、現象間を因果関係で結びつけて、世界を何らかの意味ある統一体として再構成しようとする人間理性 [=科学] の営為は、結局は虚しいものではないのか？ なかでも最も象徴的な物があの《長持》である。前章末尾でいかにもシャルルの帽子を彷彿とさせる描写によって登場し、われわれをこの考古学と歴史の章へと導いたこの長持は、その後その不在のみが殊更に強調されて二度と姿を現すことはない。《〔第4章冒頭では〕<sup>12)</sup> 鎖帷子の前の場所は空いていた。例のルネサンス時代の長持の場所だった。ゴルギユの修繕作業がまだ続いていたのだ。——〔博物館見学に来たボルダン夫人とマレスコにベキュッシュが言う〕「ここにもある物を置くはずなんですが、あいにくまだ修理中なんですよ。」——〔その後も他の見物客がある度に〕彼らは同じ説明を繰り返し、長持の置かれる

12) [ ] 内は私（筆者）による要約あるいは補注。

はずの場所を指し示した。》その挙げ句に、果てしなき修繕作業のもとにあったこの長持は、迷い込んできた牛に木っ端みじんに碎かれてこの章は終わる……。

ドリュイド僧にはもう飽き飽き。《陶器やケルト文化のことがよく分らなかったのは、歴史、特にフランス史を知らないからだ。》(物語中の時は1845年夏。)そこで例によって玉石混交、あらゆる歴史書を読破するも、《本の内容は互いに矛盾》し《史家の意見はまちまち》で《歴史の真実》への彼らの渴仰は満たされない。すでに第1章冒頭で言及されていた友人デュムシエルの著書に従って試みた、自分たちの住居の各部分を歴史上の年代と関連づける記憶術の実践の滑稽な失敗で、二人は年代の無視から事実の軽蔑へ、そこから更に歴史哲学の研究へと導かれるが、本の著者たちの客観性の欠如はここでもまた明らかで、結局《歴史を固定するすることは決してできないであろう》。しかし、《一つの主題を選び、あらゆる典拠を調べ尽くしてそれらをしっかり分析し、しかるのちにそれを一つの物語にまとめあげる、すべての事柄の縮図でありその真実をくまなく映すような一つの物語に。そのような作品は実現可能であるようにペキュッシュには思われた》。こうして、まさに『ボヴァリー夫人』以来のフローベール作品を統べるがごとき文学的創造の原理を掲げて彼らが執筆を思い立ったのは、のちのシャルル10世の長子アングレーム公爵の伝記。《「でも、あれはただの馬鹿だぜ」とブヴァールが言った。「なに構うものか。二流の人物が時として巨大な影響を及ぼすこともあるよ》——二人はここで自分たちの運命を先取りしている。作家の残したプランによれば<sup>13)</sup>、小説の末尾でコピストに戻った二人は、自分たちを「ただの馬鹿」と評する手紙を発見。「作品全体の要約でありその批評」ともなるべきその手紙を彼らはひたすら書き写す。そしてこの作品『ブヴァールとペキュッシュ』自体も結局完成されずに終わった。フローベール最後の小説の構造はどこまでも

13) Alberto Cento 版『ブヴァールとペキュッシュ』p. 125.

振れている。——この《伝記》が決して実現されないだろうことは読者の容易に予想し得るところだが、その代わりに、彼らが資料を渉猟しつつ取ったとおぼしき伝記執筆のためのノートの内容が数ページにわたる地の文で紹介される。まさに「入れ子構造」による作品内部の作品のための「創作ノート」あるいは「シナリオ」、つまりは作家自身の文学創造の舞台裏の開陳である。その一節に曰く。《[アングレーム公の生涯において] 橋が演じた重要性を指摘しなければならない。》これは先取りされた百年後の一文学研究様式のパロディーか？ われわれはすでにかかわれているのか？ この小説第4章で長持が演じる重要性を指摘しなければならない……？

ともかく、二人のこの作品は書かれずに終わる。その原因は、《毛髪は気質を、気質は人格》を示すと考えるペキュッシュについては、公爵の頭髪を別様に描いた二つの肖像画の存在であり、そして《その感情生活を知らない限りある人間についての理解は何一つ望めない》という考えのブヴァールについては、公爵の恋愛を扱った資料の欠如だった。ところが折しも、例の長持が迷い牛に壊される事件と並行して、彼らの家では雇い人の間に彼らには理由の知れないざこざが巻き起こる。《自分の家の中で起こっていることも分からずに》アングレーム公の髪や恋愛沙汰が一体何だろう。二人の関心はしかし、《家の中で起こっていること》には向かわない。《もっと重要な、もっと難しい問題がどんなに沢山あることか！》外的な事象のみでは伝記は書けない、想像力なくしては。こうして「文学」が、その《もっと重要な、もっと難しい問題》の先頭に置かれることになる。

## 第5章 文学

文学を主題とする第5章は、その中央部で、芝居の稽古に励んだ両主人公がボルダン夫人にその成果を披露する喜劇の一場面を挟んで、二人が読みふけるあらゆる種類の小説と劇作品を扱う前半と、自ら戯曲・小説の実作を志すに至った二人がそのためにまず繙く作劇法、文体論、美学といっ

た文学の理論分野を扱う後半とから成る。

その前半では、ウォルター・スコットとデュマ・ペールの歴史小説に始まって、史劇、恋愛小説、ユーモア小説、冒険小説、バルザックとポール・ド・コック、悲劇、喜劇、市民劇、そしてロマン派劇まで、(詩作品を除いて)ほとんどあらゆる小説と演劇分野の作品が言及される。それらの作品に対して両主人公が示す反応は、他の諸科学についてと同様のサイクルに従っている。つまりは、熱狂と幻滅の果てしなき反復。スコットとデュマの小説は、初めは《新たな世界の不意なる啓示のよう》であり、また《幻燈のように楽し》くて二人を夢中にさせる。が、それは長続きはしない。ペキュッシュェはデュマにおける《陳腐な挿話の多さ》と、そして特にこの両者の作品が史実に関して《とてつもなく間違いだらけである》(彼の口を通してその実例が1ページにわたって列挙される)ことから早々に愛想をつかしてしまい、かたや《ブヴァールの方もウォルター・スコットのいつも同じ効果の繰り返しにうんざりしてしまった。女主人公はたいてい父親と一緒に田舎に住んでいる。そして恋人は、子供の時に誘拐されたのだがそれがいつも権利を回復し敵に打ち勝って終わるのだ。乞食の哲人、気難しい城主、清純な乙女たちとおどけた小姓がそこではつきもので、あるのはただ長たらしい会話と愚かしい猫かぶり。深みなんてものはまったくない。》まさに、現在形に置かれた自由間接話法<sup>14)</sup>の形を借りた罵詈雑言である。二人は常にこの熱狂と幻滅のパターンを繰り返して、早々に次なるジャンルへと移っていく。代わる代わる声を出して読み合った恋愛小説のたぐいについては、《彼らはそうした作品が環境や時代背景、人物の服装について何も語っていないことを非難した。扱われているのは心の問題だけ、どこまでも感情だ！ まるで、世界にはそれより他のものは何もな

14) あるいは引用符なしの直接話法。これを自由直接話法と呼ぶ向きもある。フローベールは、エンマ・ボヴァリーの少女時代の読書についてこれと似た揶揄をその処女作に組み込んだが、それは純然たる語り手のナレーションによっていた。『ボヴァリー夫人』第1部6章。

いと言わんばかりではないか!》アルフォンス・カール等のユーモア小説では《作者は、自分の犬やスリッパや情婦についておしゃべりをするために、物語の途中で道草を食わねばならない決まりらしい。こうした屈託のなさは、初めのうちこそ彼らを喜ばせたが、そのうちに馬鹿馬鹿しく思えてきた——なぜなら、作者は自分を前面で開陳し、作品が背後に隠れてしまっているからである。》ルイズ・コレ宛手紙の数々で、作家はまさしく同じ言葉で同じ意見を述べていたのではなかったか。両主人公はここでは明らかに作者の代弁者である。「愚劣に満ちた現代という時代につばを吐きかける」という意図のもとに書かれた<sup>15)</sup>この《復讐の書》<sup>16)</sup>の主人公が、「ただの馬鹿」と見做されうる側面をもたざるを得なかった、その大きな理由の一つが恐らくここにある。かの“没個性”を原理として掲げる作家を、たとえ一時的にであれ代弁するためには、主人公は作者によって徹底的に戯画化され、読者には「ただの馬鹿」かも知れないと思わせることが是非とも必要だったのだ。

ジョルジュ・サンドやバルザックのような、作者自身にとって一筋縄ではいかない作家の場合には、その主人公が二人であるという設定が役に立つ。ブヴァールが夢中になり、褒めちぎるジョルジュ・サンドの作品を読んだペキュッシェは、そこにある《虐げられた人々の擁護、社会主義的・共和主義的側面、社会的政治的主張に心をひかれた。ところがブヴァール

15) 《私はいま、溜まりに溜まった怒りを吐き出せるような作品について思いをめぐらしています。そうです。ついに私は、私の息を詰まらせ続けてきたものに対してけりをつけるつもりなのです。この同じ時代に生きている人間たちに、彼らが私に催させる嫌悪感、この胸糞の悪さをそっくり吐きかけてやります。胸が裂けんばかりの勢いでね。だからその嘔吐はたっぷりとした、しかも激越なものとなるでしょう。》1872年10月5日、デ・ジュネット夫人宛。強調はフローベール。《次々と本を読み、ノートをとり続けています。(……) その目的はただひとつ。私の同時代人たちに、彼らが私に催させる嫌悪感を吐きかけてやるためなのです。ついに私は私の考えをやつらに言ってやります。積年の恨みをおちまけ、胆汁とともに憎悪を吐き出し、体内の怒りを射出し、憤怒を放出するのです。》同年同日、ブレンヌ夫人宛。

16) デュ・カン『文学的回想』最終章。

によれば、そうした主張は小説的虚構<sup>フィクシオン</sup>を損なっているというのだった。》その晩年、母とも慕い師とも仰いだこの女流作家について、フローベールは言うべきことは言っている。バルザックの作品は、《二人を驚嘆させた。それは、時にバビロンのように壮大であるかと思うと、時には顕微鏡で覗いた塵の世界のようでもあった。平凡極まりない事物が、全く新たな相貌を呈し始めるのだった。現代生活がこれほど深みのあるものだと、彼らは今まで考えてみたこともなかった。「なんという観察家だろう！」とブヴァールは言った。》しかし、ここで最後の言葉を与えられるのはペキュッシェだ。《僕に言わせればむしろ幻想家だね。彼はオカルティズムを信じ、王政と貴族階級を信奉し、悪辣なだけの人間に自ら幻惑され、何百万フランという金を数サンチームのように動かす。それに彼の描く中産市民は市民なんてものじゃない。まるで巨人じゃないか。なぜ平凡なものを膨らまして、あんな愚にもつかないことを書きなぐるんだ。(……)》作家は、若き日から生涯にわたって、二律背反する複雑な思いを抱き続けたこの《偉人》に対する思いのたけを、「ただの馬鹿」かも知れない人物の口を借りて開陳している。

ついで、彼らの興味は悲劇から喜劇、市民劇へと移って行き、そして1830年代のロマン派劇に達したところで、日頃芝居の稽古に励んできた両主人公がその成果をボルダン夫人に披露する喜劇の一情景となる。二人が演ずるのは『フェードル』『タルチュフ』と『エルナニ』の一部。それが終わって、雨上がりの田舎道をブヴァールがボルダン夫人を送って行く。《彼はまだ自分の朗唱に酔っていた。そして夫人のほうも、ある驚きを、「文学」のもつ、人を魅惑し呪縛する力のようなものを心の底で感じていた。「芸術」は時として凡庸な精神をも揺り動かす。そして、幾多の世界が、鈍重この上もない解釈者〔役者〕によって開示されることがあるものだ。》この作品では極めて稀な、ただ語り手にしか帰し得ない、現在形に置かれたこの箴言調の文章に、これも極めて稀な、この作品では恐らく唯

一の、『ボヴァリー夫人』中のあるくだりとも見紛うリリズム溢れる描写文が続いている。《陽が再び射ってきて、木の葉を輝かせ、茂みの中のあちこちに光の斑点をまき散らしていた。雀が三羽、切り倒された菩提樹の老木の幹の上で、クックと鳴きながら飛び跳ねていた。花盛りの茨がそのバラ色の花束を見せ、リラの枝が重くたわんでいた。》

ここで、我らの両主人公もとうとう文学の実作を志す。まずは戯曲、そして小説。インスピレーションを求めて呻吟。その果てに、『感情教育』の画家バルランさながらに、作劇法・文学批評・文体論・文法・美学といった文学の理論書を涉獵。しかし、この分野においても諸説の矛盾撞着は苛立たしいばかり。そこで彼らの結論——《〔個々の作品についての〕識者の意見は嘘八百、一般大衆の判断は信じ難いほど馬鹿げている。》《統辞法はただの気まぐれ、文法は幻想の産物だ。》ブヴァールには《美学は駄法螺、(……) 結局、修辞学とか詩学とか美学とかをこね繰り回している連中は馬鹿としか思えない。》かたや《数々の疑問に悩まされ》つつ、《理論と作品、批評家と詩人を和解させて、美の本質をつかまえない》と念じ続けたベキュッシュは、懊悩のあまりに黄疸にかかってしまう。こうして、『文学』など誰も愛してはいないのだ」という苦い最終的確認と、《恐らく黄疸のせいもあったのだろうが、彼には世の中が暗く思えてならなかった》という、暗い政治の季節の到来の予告とともにこの章は終わる。

## 第6章 政治

第6章は、1848年2月25日、革命勃発の一報がシャヴィニヨルにもたらされて始まり、1851年12月3日、ルイ・ナポレオンによるクーデタを伝える新聞報道によって終わる。ここでは『感情教育』第3部で流れた時間と全く同じ時間が流れ、シャヴィニヨル村の人間模様は首都パリの政情の戯画化された縮図となる。

48年2月25日、臨時政府樹立の報がシャヴィニヨルにもたらされ、共和

制の宣言書が村役場に貼り出される。ブヴァールとペキュッシェは喜んで「自由の木」を献納する。植樹の儀式における司祭の偽善に満ちた演説。《歴代の王を厳しく非難したのち、彼は共和国を讃えた。文学を文芸共和国、教会をキリストの共和国と昔から言うのではないか。前者ほど無垢なもの、後者ほど美しいものがまたあろうか。》社会的価値が逆転した革命初期の風潮。土地の大貴族ファヴェルジュ伯爵は国民軍の教練に欠かさず立ち会い、酒場では誰彼にともなく酒をふるまう。《当時は権力者が下層階級に媚びへつらっていた。何事も労働者優先、(……) 今や彼らの方が貴族だった。》4月の代議士選挙の際には、村中を覆うこの初めての普通選挙の眩暈にとらわれて、あの《あらゆる弱さのそなわった》フレデリック・モロー同様、我らの両主人公も立候補の夢を抱く。それも無理はない。村の司祭ですら《私を代議士にならしめたまえ》と神に祈るのだから。超然としているのは農民だけだが、シャヴィニヨル村でこの農民層を代表するグイ爺さんにとっては、《税金さえ安くなればどんな政府でも構わない》のだ。結局48年のこの革命では、大革命以来の土地政策によって多くは自作農となったこの農民層と、有産市民たるブルジョワ自由主義者とが、貧窮のあまりに暴動を繰り返すプロレタリアの力の爆発と、私有財産の廃止を主張する社会主義急進派に恐れをなして急速に保守化し、こうしてフランスの政治は、48年の革命で勝ち取られた共和制がその普通選挙によって自らを覆し、結局は皇帝による独裁制に逆戻りするという皮肉な、そしてこの上なく《愚劣な》歴史を現出することになる。革命の右傾化は、社会主義者・プロレタリア陣営の惨敗に終わったこの48年4月の選挙の直後に始まる。《反動が起こりつつあった。》パリの「6月事件」に呼応するかのごとく、シャヴィニヨルでは指物師ゴルギユ率いる労働者の群れが、《仕事》と《働く権利》を要求して村のお歴々が立てこもる村役場を取り囲む事件が起こる。いかにしてか、ペキュッシェが突然その二階の窓辺に現れて《市民諸君！》と群衆に呼びかけるが、とたんに野次が飛んで引きずり

下ろされる《笑劇》風一場面。結局《労働者たちの利益のために村が犠牲を払って》新しい道を一本つくる約束と、ゴルギユが3か月の懲役に服することで、このシャヴィニヨル村の6月事件にはけりがつく。そしてこの年12月の大統領選挙では《シャヴィニヨルの村民はこぞってボナパルトに投票した。》

シャヴィニヨル村における我らの両主人公の相対的な知的優越は、この「政治」の章で一段とあらわになっている。《大衆の愚かしさ》ゆえの、普通選挙に対する彼らの否定的見解、そして《結局、平民も貴族も同じように始末におえない》という彼らの感慨は紛れもなく作者のものである。自分の属する階級・党派の利害のみに依って、《「社会」の擁護、「公」の安寧こそが最高の法》という固定観念から一歩も抜け出せないファヴェルジュやマレスコ等の《秩序派》の人間たち、かたや、『感情教育』の末尾で警官に豹変する社会主義革命家セネカルさながらに、貧困のあまりにこけた頬、牡牛のような頑固さと傲慢とをもって、《軍備撤廃、司法官職の廃止、賃金その他あらゆるものの平等化、これらの施策をもって共和政体のもとに黄金時代を出現させる——これを手つとり早く実現するために、一人の勇敢な独裁者を指導者にいただいて！》という信条に凝り固まった教師のプティ、さらにはそのプティに対し、司祭に小学校教育の監督権を与えた1850年成立のファルー法を盾にして、村からの追放をにおわせて聖体拝領を強制するジュフロワ神父。これがシャヴィニヨル村の人間たちだ。そして、小説にはこういう人間たちしかいないのだから、「これが世の中だ」と小説は言っているのだ。その中であって、いかなるドグマチスムにも陥らず、どこまでも懐疑の海を漂い続ける思考の柔軟性と人間らしさを保つ唯一の存在が、我らの双頭の主人公なのだ。反動勢力の巻き返し後、秩序が回復されて<sup>17)</sup> ファヴェルジュ伯爵邸で催された祝宴での話題はも

17) すなわち『感情教育』第3部2章のダンブルーズ邸での晩餐会と同時期である。

っぱら《イギリス本土上陸作戦》と《君主政治の正しさ》、フランスの統治には不可欠な《鉄腕》<sup>18)</sup>、そして《権威》の重要性と《王の神権》。料理や調度品の豪華さと、交わされる会話の内容の貧しさとの間のコントラストに、二人は啞然とさせられる。《なぜなら、言葉は常に環境に対応し、高い天井は高遠な思想のために作られていると思われるからである。》この宴会から開放されての帰り道、鬱積した思いが二人の口をついて迸る。《なんという馬鹿ども！ なんとる低級さだ！》聖ポリュカルポス<sup>19)</sup>の慨嘆の叫びである。

その叫びを、《第一、あの王の神権とかいうやつはいったい何だ？》という疑問が締めくくり、これを契機に両主人公は彼ら本来の仕事に立ち戻る。すなわち書物による「知」の渉獵。まずは彼らの質問に答えてくれたある学者の手紙の概要の、地の文による紹介。フィルマーとボシュエの王権神授説の説明に引き続き、これに反対したロック、エルヴェシウス以下、多くの法・哲学者、神学者の名前が列挙される。二人は、為政者に対する人民の権利を主張する理論の存在に特に関心を抱いたようであり、彼らが自ら書き分析する「政治学」の本は、ルソーの『社会契約』に始まって、サン＝シモン、フーリエ、ルイ・ブラン、プルドン、エチエンヌ・カベ、ピエール・ルルー等の、空想的あるいは理想主義的と言われる初期社会主義理論家の書物に限られている。フローベールは、すでに『感情教育』執筆に際してこうした思想家の本を《社会主義について講義ができるほど》綿密にノートをとりながら読破したが、その書簡集は彼らに対する極めて否定的な言辞に溢れている。——《何という専制主義者で田舎者だ！》《彼らみんなに共通の特色は自由とフランス革命への憎しみだ》《彼らは中世に首まではまりこんでいる。みんな聖書の御告げを信じているのだ》<sup>20)</sup>。

18) 「フランスを統治するには鉄腕が必要である」『紋切型辞典』“腕”の項。

19) 古代スミルナの殉教者。フローベールが自らにつけた綽名。

20) 以上、1864年夏。

フローベールにとって彼らの最大の罪はネオ・カトリズムに結びついたこと。その信念は、『教育』執筆の最終段階ではますます強固になったことが伺える。《一方ではネオ・カトリズムが、一方では社会主義がフランスを馬鹿にしてしまいました》<sup>21)</sup>。《私はわれわれの被った災いの一部は共和主義的ネオ・カトリズムがもたらしたと信じています。(……) サン・シモンからブルドンにいたるまで、誰もが宗教的啓示から出発しているのです》<sup>22)</sup>。《私たちが今日、道徳的・政治的にかくも低劣なのはヴォルテールの大道すなわち正義と権利の道を行く代わりに、感情によってカトリズムに導いていった、ルソーの小道を選んだことにあると私は思っています。博愛ではなく公正に対して心を用いていたら、もっと高尚な世界になっていたでしょうに》<sup>23)</sup>。——『感情教育』では主としてデローリエが述べていた作者自身のこの信念を、今はブヴァールとペキュッシェが代弁する。個人は契約によって自由を放棄したとルソーは言うが、そんな契約の証拠がどこにある？ 市民はひたすら政治に専念することになるが、仕事をする人間はやはり必要なので、ルソーが称揚するのは奴隷制だ。諸科学は人類を滅ぼし、演劇は風俗紊乱の元凶、金銭はそもそも忌まわしい。そして国家は、死の厳罰をもってしても一つの宗教を強制すべきである。こう要約されたルソー思想についての結論が、《なんだ！ これがああ93年世代の神、民主主義の大御所か！》という彼らの言葉に託される。そして《あらゆる社会改革の理論家のしたことはルソーのコピー》に過ぎない。サン＝シモンとフーリエの説は二人には結局《ちんぷんかんぷん》。空想的社会主義者たちが求めるものは《詰まるところ圧制だ》と、ここではブヴァールが作者を代弁して、その滑稽な実例を列挙するのに対して、ペキュッシェは《こういうユートピストたちに滑稽なところがあることは僕も

21) 1868年9月19日、ジョルジュ・サンド宛。

22) 1869年2月2日、ジュール・ミシュレ宛。

23) 1868年1月2日、アメリ・ボスケ宛。

認めるよ。しかしそれでも彼らは、やはり愛すべき人間たちだ。この世の醜さが、彼らを深く悲しませた。だからこそ、それを美しいものにするために彼らはあんなに苦しんだんじゃないか。(……) 安楽に暮らそうと思えばそうも出来たのに、彼らは昂然と、自分の道を歩いたのだ(……)》と、書簡集中の作家以上の公平さを示している。次章を準備するかのような、初めての深刻な仲違い。それが解けると、《二人は自分たちの研究に一つの基礎が欠けていることに気づいた——経済学だ》。彼らが遍歴する「知」の世界のカatalogは、あくまで完璧を期さねばならない。たとえ、《二人は需要と供給、資本と貸貸、輸入と保護貿易について調べた》に過ぎないとしても。そして、とうとう1851年12月3日、ボルダン夫人がルイ・ナポレオンのクーデタを報ずる新聞を持ってくる。口もきけないほどの驚愕、無力感。そして、作者とともに、人の世に審判を下す二人の言葉がこの「政治」の章を締めくくる。《ペキュッシェは言った。「ブルジョワどもは凶暴で情け知らず、労働者たちはただ妬み心のみで動き、坊主どもはみな卑屈で卑劣、そして民衆は、鼻先に飯盒をあてがわれさえすればどんな暴君でも受け入れるんだから、ナポレオンはいいことをやってくれたよ。民衆なんか猿ぐつわをはめて、踏みにじり、皆殺しにしてみたいものだ！ 正義を憎み、卑怯で無能で盲目のやつらのことだ。当然の報いだよ！」<sup>24)</sup> ブヴァールも自分の考えを言った。「進歩なんて寝言みたいなものさ！」そして付け加えた。「それに政治だなんてじつに不潔な代物だな！」「ありゃ科学じゃないよ」とペキュッシェが答えた。》

---

24) 1870年の普仏戦争とパリ・コミュン後の、蜂起した民衆が破れ去ったあとで、フローベールは書簡で、このペキュッシェにもまさる勢いで、彼らを罰せよと叫んでいた。《コミュンの連中は一人残らず懲役刑にして、囚人として首に鎖を付け、この血まみれの馬鹿者どもに廢墟のパリを片付けさせてやればよかった。》1871年10月12日、ジョルジュ・サンド宛。

## 第7章 恋愛

ルイ・ナポレオンのクーデタとともに、政治と人間社会に対する救いのない絶望の気を漂わせて前章が終わり、《陰鬱な日々が始まった》という一文で開始される第7章は、両主人公それぞれが（ペキュッシェは若い女中メリーと、ブヴァールは隣の後家ボルダン夫人と）同時進行で繰り広げる恋の空騒ぎを対位法的に語る、小説中で最も短く、しかもそこでは一冊の書物も問題とされない例外的な章である。フローベールが残した《シナリオ》では、この章は終始一貫「愛」と題されている。しかしそれがいかなる観点からとらえた「愛」であるか、書簡集中でそれを語る作家の口調が如実に表している。《目下、ブヴァールとペキュッシェの恋愛の真っ只中だ。12ページ以上にはならないだろう。1月には次の哲学の章に入りたいものだ。》<sup>25)</sup> 《[パリのある書店で、エドワール・フルニエとかいう人の書いた『女性についての毀誉褒貶集大成』とか何とか、これに類した題がついた本を探して私に送らせてほしい……] ペキュッシェがやっと今、童貞を失った。それも地下の酒蔵でね！ あと1週間足らずで私の「愛について」の章にはけりがつく。これから彼に悪い病気をこっそり仕込んでやるところ。そのあとでご二人の「女」談義がくるのだが、そこでその〔君に頼んだ〕本が必要になるんだ。》<sup>26)</sup> 《[もし副題をつけるとしたら「学問の諸分野における方法の欠如」とでもなるであろう私のこの本では] 女性はほとんど、そして愛は全く扱われません。(……) 男爵夫人がめでたく子爵と結ばれるかどうかを知ろうとして本を読む読者はがっかりするでしょう。》<sup>27)</sup>

《第二巻をまつまでもなく》その全編で《書物の引用が組織的に》行われているこの作品<sup>28)</sup>の中で唯一、表面的には一冊の書物も喚起されない

25) 1878年12月(?)、エドモン・ラポルト宛。

26) 1878年12月15-16日、モーパッサン宛。

27) 前出、注8)、テナント夫人宛手紙の続き。

28) 工藤庸子「フロベールとブヴァール」『文学』岩波書店、1988年12月 p. 171.

この章においても、やはり下敷きにされた典拠があったとするならば、それは恐らく、フローベール自身の過去の恋愛小説である。《幻滅を恐れて研究は一切とりやめ》、時には開いてみた本を《読んだところでなんになろう》とつぶやいてすぐに閉じてしまう我らの両主人公が陥るあの《底知れぬ孤独、完全な無聊》、《どんよりした空が、その単調さで、希望のない心を押しつぶすときにはとりわけ重苦しいあの田舎の倦怠》、その中で聞く《塀に沿って歩く男の木靴の音、屋根から落ちる雨垂れの音》、《時折、枯れ葉が一枚、窓ガラスに軽く触れては、舞い狂い、飛んでいく。かすかな甲の鐘の音が風に運ばれてくる。家畜小屋で牛が啼く》。同じノルマンディの田舎トストに、同じ倦怠、同じ絶望に苛まれ、《こんなことをしてなんになろう (……) もう本もみな読んでしまった》とつぶやく女がいた<sup>29)</sup>。そして《とりわけ我慢がなかった》のが夫と差し向かいの食事時だった彼女と同様に、我らの両主人公にとって《今まで見過ごしてきたお互いの癖が鼻持ちならなく》なるのも食事時だ。食卓布の上にハンカチを置く癖、体を揺すりながらしゃべる癖……、そしてその果ての同床異夢もしかりだ。《鼻と鼻を突き合わせていながら二人はめいめい違ったことを考えていた。》このときペキュッシェが考えていたのは、彼がはからずも覗き見て、彼にとっては目眩く情熱の世界の啓示となったかのごとき、女たらしゴルギユとカスティヨン夫人との間の恋の愁嘆場だが、この場での女の科白はロドルフを搔き口説くエンマの科白とほとんど変わらない。そして女中メリーは、あの森で初めてロドルフに身を任せたとときのエンマ同様、(こちらは《地下の酒蔵で》)手で《顔をおおって》ペキュッシェに身を任せる。一方、そのペキュッシェを《毎晩ほったらかして》訪ねてくるブヴァールを、ボルダン夫人は、作家が偏愛しアルヌー夫人も愛用した《鳩羽色の絹の》ドレスを着て迎え、作家が封印した心の中の《chambre royale》<sup>30)</sup>を垣間見せてくれたはずの作品の終わり近く、あの名高い最後

29) 『ボヴァリー夫人』第1部9章。

の場面のアルヌー夫人と同様に、《暖炉のそばに腰掛けて》《ドレスの下から片足を覗かせ》、それを見て我慢ができなくなったブヴァールは、いきなり床にひざまずいて結婚を申し込む。作家が《自らの心の最良の部分を投影して》<sup>31)</sup> 作り上げたはずの作品の、まさに冒瀆的な、凄まじいばかりのパロディー化だ。

結局ペキュッシュは女中に性病をうつされ、ブヴァールは不動産目当ての後家さんとの結婚を危うく免れて二人の感情教育は完結し、こうして本来の彼ら自身に立ち戻った二人は、(恐らくはモーパッサンが見つけるのに一役買った本にあった?) 《女について流布されているあらゆる陳腐な常套文句を並べたてた》——不思議な必需品、しかし本当に必要か? 女は男を犯罪に、ヒロイズムに、獣のような愚行に駆り立てる。スカートの下に地獄、接吻の中の天国、茂みから漏れるキジバトのさえずり、蛇ののたうち、猫の爪……。こんな女を持つなどという欲望から《絶対的な、奥深いものだった》(第1章) 彼らの友情が一時途絶えたのだ。《「もう女なんかやめにしような。女なしで暮らそうよ」二人は感極まって抱き合った。》しかしこの二人は、すでに初めて出会ったあの日、「女」についての同様な議論の果てに、同じ結論に達していたのだ。同じベンチに同時に腰掛けた二人の前を結婚の行列が通るのを見て、二人は《女について話した——女なんてものは蓮っ葉で、口うるさく、強情だ。にもかかわらず、しばしば男よりましなこともある。といて、男より悪い場合もある。結局、女なしで暮らすにしくはない。》紋切型観念の連鎖が誘う、思考の堂々巡りの果ての破れかぶれの結論。彼らの感情教育はここですでに終わっていたのだ。

ペキュッシュの病気も癒えて心機一転、自分たちの健康のためには冷水療法が効きそうだと、素っ裸で庭に出て水を掛け合う二人の姿に村人たち

30) 《王の部屋》1859年11月、アメリ・ボスケ宛。

31) Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p. 101.

は眉をひそめ、こうして、「愛」を主題にしてその価値を全否定するかの  
ようなこの章は、フローベールの予測通り12ページで幕を下ろす。

## 第8章 体育と形而上学 (体操・交霊円卓・磁気療法・降神説・神 秘思想・魔術・占い杖・哲学)

冷水療法に続いて《体質改善》のために両主人公が挑戦する体操の実践  
によって、体育と形而上学、すなわち物質〔肉体〕と精神、および両者の  
関係をテーマとする第8章が始まる。

切り倒した菩提樹の幹を利用しての《平均台》と樹樁をよじ登る《垂直  
棒》の練習に始まって、重量挙げに似た《ペルシャ式棍棒》や、《救急術》  
《軍隊式登攀術》等を経て《竹馬》まで、図解入り「体育」マニュアル本  
の記述に忠実に従う両人の、涙ぐましくも滑稽な姿。時は恐らく1852年。  
彼らが初めて出会って物語が始まった1838年夏に47歳だった二人は、少な  
くとも61歳にはなっている。早々に(4ページで)、《体操はどう考えても  
彼らの年頃の者には不向きである。彼らはあきらめた》という結果になっ  
たのも無理はない。

しかし、彼らの知的エネルギーは衰えることを知らず、偶然知った《交  
霊円卓(テーブル回し)》の流行をきっかけに、今度は様々な超自然現象の  
探求が開始される。二人が試みるテーブル回しの実験はすべて失敗し、テ  
ーブルの上の物はびくとも動かない。《それでもこのテーブル回しの奇現  
象自体には疑う余地がなかった》と、語り手はそれが自らの判断である風  
を装って、この現象の原因を説明しようとする諸学者の説を紹介する。そ  
の中の一つ、多くの人間が集まったところに発生する磁流によるという説  
に触発されて、二人は次にメスメル動物磁気説に基づく催眠療法に熱中  
する。様々な疾患に悩む村人たちと動物を相手に、催眠術と磁気療法の実  
践。二人のにわか磁気治療師が大まじめに繰り広げる(世の良識を代弁する  
らしいヴォコルベイユ医師および恐らく多くの読者にとっては)荒唐無稽な治療

と催眠術の実験の様子が、リアリズムの手法に従って克明に描写される。ジェルメーヌの耳鳴りや牡牛の便秘治療のように明らかな《笑劇》風の挿話に混じって、そして《ブヴァールとペキュッシュェは結局成功しなかった》という語り手の言明の傍らに、頬の腫れ物が治ったマルセルや、医師の細君の行動を離れた場所で正確に透視したバルベ嬢の挿話のように、説明のつかない、しかし明らかな成功例がことさらに書き込まれている。読者の読みを故意に迷わせるために仕組まれたとおぼしい仕掛けに満ちたこのくだりの解釈の指針を、作品執筆に先立つこと25年、『ボヴァリー夫人』執筆中の作家の書簡の一節が与えてくれる。《魔法使いとか占いの杖とかをことさら取りあげて糾弾するのは、なんとも幼稚なことだという気がします。理にそぐわないことはけしからんなどとはちっとも思わない。それをただありのままに語ってもらいたいです。そして、そうしたことを攻撃する人は、それと同じように愚劣なことに違いないそれと正反対のことを何故攻撃しないのかと思います。こういう風に、どっちの端から捉えてみてもうんざりするテーマが沢山あります。(つまり、ある考えを扱うには、どちらか一方からではなくその中間の立場からしなければならないということなのでしょう。) だから、ヴォルテールや動物磁気、ナポレオン、革命、カトリシズム等々について、人がこれを称賛するにしても貶すにしても、どちらも同じように僕をいらつかせます。何事につけ、こうだと決めつけて結論を出すのは、ほとんどの場合、愚かなことだと僕には思えます。》<sup>32)</sup> すなわち、この19世紀後半の科学万能の風潮のただ中で、恐らくは芸術家としての直観から、世界は《空間のほんの片隅から得られたデータに基づいて出来ている》(第3章)に過ぎない科学や人間理性の力の及ばない現象に満ちていると観じ、その不可知の世界の諸現象について断定を下す行為は愚であると思ひ定めたひとつの信念が根底にあるのだ。『ブヴァールとペキュッシュェ』の、徹頭徹尾、自分にとっての《利害関係》

32) 1853年3月31日、ルイーゼ・コレ宛。強調はフローベール。

(第5章)に発する固定観念すなわち《結論》に縛られた人間たちの中において、我らの双頭の主人公のみは、あらゆる紋切型観念に侵され、読んだ書物が下す結論にただちに熱狂的に与するかに見えながら、まさに飽くことのない検証と、各自が読んだ書物の化身となって互いに反駁しあう相対化の作業の果てに、ついには一対の存在として何事についても結論を下すことを控える術を学んでゆき、最後には《コピスト》としてこの世の愚を《ありのままに》映しだす作品(『愚言集』<sup>33)</sup>と『紋切型辞典』)の作者となる。残された作家のプランが予定していたこの作品の最終場面で起こるのは、『聖ジュリアン伝』『純な心』そして『聖アントワヌの誘惑』の結末部と通ずる、あらゆる価値の奇跡的な逆転であり、そして「ただの馬鹿」かも知れなかった我らの主人公は、そこで、フローベールの芸術家について訪れる恩寵の状態を実現するはずだったのではなかろうか。

しかし、今はまだその到達点をはるかに見据えて、彼らの果てしない試行錯誤が続く。磁気療法に続いて、アラン・カルデックの降神説、スウェーデンボリの神秘思想、魔術(ブヴァールの父親の霊を呼びだす試み)、そして最後に「占いの杖」による金の延べ棒探し。その宝探しの最中ペキュッシュが二度にわたって陥った恍惚状態は、帽子の庇に塗ったニスが原因と判明。(あるいはメリーからうつされた梅毒によるものか?)《とにかく、これで問題は解決した。恍惚状態は物質的原因によるものなのだ。それでは、その物質とは何か? 精神とは? それが相互に影響を及ぼし合うのは何故なのだろう?》こうして二人は、いよいよ《諸学問の学問》<sup>34)</sup>たる形而上学の迷宮に足を踏み入れる。古代哲学は敬遠して近・現代の哲学書を読み漁り、一方(ペキュッシュ)は理性論、他方(ブヴァール)は経験論の立場に立っての論争。デカルトの三つの論証から《究極原因》の存在を巡っ

33) Sottisier. 『ブヴァールとペキュッシュ』の書かれなかった《第二巻》で、両主人公が書き写す《コピー》の内容を指す、研究者間の通称。

34) Alberto Cento 版『ブヴァールとペキュッシュ』p. 66, 105.

てスピノザの研究へ。絶対の無限たる実体、神の無限の属性、「延長」の中の一点に過ぎないわれわれの宇宙。神はその「延長」を包み、「思惟」はあらゆる可能な宇宙を含む。その「思惟」を包む「実体」……《彼らは、夜、凍りつく寒さの中を、気球に乗って底知れぬ深淵へと果てしなく運ばれていくような気がした。》悪魔の翼の上でアントワヌが知った恐怖と戦慄。《これはひどすぎた。彼らはあきらめた。》もう少し肩の凝らない教科書用の概論書で哲学の勉強を続行。観念とは物質的なものか精神的なものか。それと感覚との関係は？ 各自がロック、コンディヤック、ヴォルテールの説に拠って、反駁の応酬。《哲学の勉強で彼らはずいぶん偉くなったような気がした。》農業や文学や政治などに、よくもあんなに夢中になれたものだ！ 続いて「魂の機能」の分類法。《記憶は過去に通じ先見は未来に通じる。》当たり前のことを難しげに証明する術学的な手続きにうんざりしながらも、二人は《努めて抽象的な言葉だけを用いる》習慣を身につけて論理学を卒業し、これを武器にして哲学的思考の拠るべき《基準<sup>クリテリウム</sup>》の総点検に取りかかる。しかし、良識、感覚、理性、倫理、明証、天啓……何一つ確実なものはない。《恐ろしい懷疑の淵に落ちこみそうだ。》理解不能のこと *mystères* を説明しようとする沢山の学説が互いに否定し合っている。《二人とも哲学者にはもううんざりだと本音を吐いた。(……) 形而上学など何の役にも立ちはしない。こんなものが無くたって人は生きていける。》しかし、この後もなおしばらくは哲学は二人を捉え続け、抽象観念一般を否定するパークリーと、ベキュッシュによるヘーゲル哲学の入門書の要約（《世界の存在は生から死へ、死から生への不断の推移に過ぎないのだから、万物は存在するところか、何物も存在しない。すべてはただ生成するのみ》）を経て、形而上学は二人を汎神論と懷疑主義から《絶対的ニヒリズム》<sup>35)</sup> へと導いて行く。《何物も存在しないという確信は（たとえそ

35) 1879年4月7日、デ・ジュネット夫人宛。『聖アントワヌの誘惑』においても、悪魔によるスピノザ哲学の講義に続き、懷疑思想と虚無の暗示によ

れがいかにか嘆かわしいものであれ) ひとつの確信であるには違いない。そうした確信を持ち得る人は多くはない。この優越感が二人に自尊の念を吹き込み、彼らはそれをひけらかしたくなった。そのいい機会がやってきた。》ニヒリズムと《笑劇》の奇妙な混淆である。二人は村人の誰彼なしに、自由意志も善と悪の区別も神の摂理もすべて否定する《忌まわしい逆説》を説いてまわる。それは《結局、社会の基礎を覆す》ことだった。《二人の明らかな卓越性が人々の自尊心を傷つけ》、二人は村中の敵意的になる。《すると、彼らの中でひとつの始末に負えない能力が芽生え発達してきた。至る所に愚劣を感知し、そしてそれがどうにも我慢できなくなるという能力である。》書簡集の読者にとっては、両主人公が作者の代弁者であることのこの上なく明確な宣言である。《笑劇》の主人公として、彼らはこの後も「ただの馬鹿」として振る舞い続ける。しかし、真の愚劣、作家がこの世で真に憎むべき唯一の敵であり犯罪であるとして数々の書簡で糾弾して止まない《愚》なるものは、彼らの内にはなく外にあることがここで明示されている。その世界の《愚》が彼らを押しつぶす。《クーロンやマレスコ、フーローのような人間が、地球の反対側にもうようよしていることを思うと、彼らは地球全体の重みが自分たちの上にのしかかってくるような気がした。》深い落胆、完全なる意気消沈。やれ蒸留だ、文学だと浮かれていたあの《幸福だった》時代が今は懐かしい。野原で遭遇した腐乱した犬の死骸を契機に、彼らは《死の観念にとらわれ》て自殺を決意する。が、どこまでも“言葉”の存在たる二人は、まず《死について語り合い》<sup>36)</sup>《自殺の問題を検討》し、《自殺の方法を論じ合った》末に、屋根裏部屋で首を吊る方法に決定。しかし、まだ《遺書を書いていない》ことが最後の

---

で第6章が終わり、次章の「死神」による死への誘惑へと引き継がれる。

36) 《死なんでもものは存在しない。人間は朝露の中に、微風の中に、星の中に消えていくのだ。樹液、きらめく石のかけら、鳥の羽、そんなものになるのだ。(……) われわれの行く手にある虚無も、われわれの背後にある虚無以上に恐ろしいものではないのだ。》

瞬間に二人を思い止まらせる。そう、彼らにまだ退場は許されない。彼らの《遺書》たる《コピー》(『ブヴァールとペキュッシュ』第二巻)を書き上げて作家の《遺書》<sup>37)</sup>を完成させるまでは。自殺を思い止まった二人はすすり泣きながら窓辺に寄る。《インクのような黒い空》<sup>38)</sup>にきらめく無数の星。折しも(1853年12月24日)村の教会で挙行中の真夜中のミサに参列。二人は《魂の中に黎明がほのぼのと立ちのぼる》のを感じ、こうして「宗教」をテーマとする次章を準備して第8章は終わる。

### 第9章 宗教 (カトリック信心)

すんでのところまで死を思い止まった二人には、それが単なる偶然とは思えない。《あらゆるものに期待を裏切られてきた二人は、純な心で何かを愛し、精神の慰いを得たいという欲求にかられ》、そして聖書に心をひらく。

《福音書は彼らの魂をはればれとさせ、太陽のように彼らの目をくらませた。(……)二人の心をとらえ陶然とさせたのは、身分の賤しい者への愛であり、貧しい者の保護であり、虐げられた者の称揚である。そして、空が豁然とひらかれたこの書物の中に、神学的なものは何一つない。あれほど沢山の教訓の中に一つの教義もなく、要求されているのは、ただ心の純潔である。》反カトリックと無神論を標榜し続けた作家の書簡中には見ることのできない、福音書を、どこにも皮肉をまじえずに称揚する語り手の言葉である。しかし、この章の末尾近くで、その同じ福音書の教えに対する彼らの破れかぶれの反抗的な言辭がこの「宗教」の章を締めくくる。《それほど倫理的でもありませんよ、福音書は。最後にちよっと働いた者

37) 《ツルゲーネフが、例の二匹のわらじ虫の話、あの大作に早くまた取りかかれと盛んに言ってきます。彼はあれがとても気に入っているのです。でも、あの本の難しさに私は怖じ気づいています。しかし、私はどうしても死ぬ前にあの本を仕上げたい。なんと言っても、あれは私の遺書なのですから。》  
1876年2月18日、ジョルジュ・サンド宛。

38) 作品冒頭のサン＝マルタン運河も《インク色の水をたたえて》いた。

が最初から働いていた者と同じ報酬を受ける。持てる者に与え、持たざる者から取りあげる。平手打ちを食うがままに、盗まれるがままになっているという教えに至っては、凶太い奴や臆病者、狡賢い人間どもを増長させるばかりじゃありませんか。》結局、宗教（カトリシズム）も諸科学や文学、歴史などと同様に、我らの両主人公がたどる熱狂から幻滅へのサイクルの一要素に過ぎない。そして、彼らを最終的に宗教から離反させるもの、それはここでもやはり書物、そしてこの小説ではジュフロワ神父が体现するカトリック教会のドグマチスムである。

告解から謙譲・純潔の美徳への憧れへ、そして《秃鷹の嘴のような鼻》をした古物商から聖具一式を購入した後の聖母マリアの霊場巡りへと、彼らの信心は型通りに進む。折から小作地と引き換えに終身年金を受けるといふ契約がボルダン夫人との間で成立。すでに前章の途中から深刻な経済的逼迫にさらされていた二人にはそれは霊場参りのご利益としか思われず、ついにブヴァールもペキュッシュェとともに聖体を拝領する。（前者にとっては初の聖体拝受。）しかし、彼らのカトリックからの離反がそれと同時に始まることを象徴するかのように、二人が聖体拝領から帰ってみると小包が届いている。ルイ・エルヴィユ著『キリスト教批判』。フローベール自身が参照した合理主義的キリスト教批判書の内容を寄せ集めた架空の書物である。<sup>39)</sup> ブヴァールは《神の肉体を受け入れても》自分の内部に何の変化も起こらないことに失望し、かたやますます《信心を深める》ペキュッシュェも、どれほど祈りいくら断食の度を増しても《自己を解脱することもできなければ完全な瞑想に達することもできない》ことに悩み、多くの神秘主義作家の書物に救いを求めて失望し、彼も《数々の疑念に苛まれる》ようになる。

ルイ・エルヴィユの著書を武器として、ジュフロワ神父との聖書の解釈をめぐる論争の口火を切るのはブヴァールである。原罪、地獄に落ちた人

39) Le Livre de Poche 版の注 p. 342.

間の受ける永遠の刑罰、三位一体——罪を犯し易いように作った人間をなぜ神は罰するのか？ 異教徒や、洗礼を受ける前に死んだ幼子が改悛の機会を与えられずに永劫の刑罰を受ける不条理。三角形の三辺にたとえられる三位一体。しかし三角形の三辺はその一つ一つが三角形ではない。すると三様の神がいることにならないのか……？ ジュフロワ神父の答えは、この最初の論争を締めくくる彼の二つの言葉に凝縮して示されている——《そこが神秘なのです》《わけなんか分からなくても崇拜すればいいのです》。モーセ五書の信憑性をめぐるブヴァールとの二度目の論戦を締めくくるのも神父の言葉である。《「キリスト教徒ならざる者は学者でもないのです」科学という言葉に触発されて彼はさらに皮肉を言った。「あなたの言うその科学は種から穂を伸ばさせることができますか？ いったいわれわれは何を知っているというのでしょうか？」》モンテーニュの言葉 (Que sais-je?) のもじりらしいこの最後の言葉に次の文が続く。《しかし彼は、世界がわれわれのために造られたことも知っていたし、大天使は天使の上に位することも知っていた。人間が〔天国で〕三十歳くらいの状態で蘇ることも知っていた。》これが神父の言葉を自由間接話法に置き換えたものか、語り手による地の文であるのかは、例によってぼかされている。しかし、そのいずれであるにせよ、近代懐疑主義の標語に直接続く、この直説法半過去形による「彼は知っていた」という三度の繰り返しに、作家の限らない皮肉と嘲笑が込められていることは明白である。神父との論争はこの章全体で七～八度にわたって繰り返されるが、三度目以降は、ブヴァールはもとより、小説冒頭のあのベンチの上では《宗教に対していくらかの尊敬心を示し》ていたベキュッシュもそれに加わって、むしろより積極的に、あらゆる機会をつかまえて神父相手に反カトリシズムの論陣を張る——新・旧約聖書の記述の矛盾点について、教会の不謬性の根拠、イエスの神性、無数の殉教者、また殉教と関連し歴史上、新教・旧教の名のもとに犯された数限りない残虐行為について、奇蹟について……。しかし、カ

トリックの教義の正しさを論理的に《証明する》という困難な仕事に、ジュフロワ神父が『ボヴァリー夫人』のブルニジャン神父以上に長けているはずはない。そもそも両者とも《人は何かを証明しようとしたとたんに愚劣に陥る》という固い信念を抱く作家の作中人物なのだ。

その作家自身の証言によれば『ブヴァールとペキュッシュ』は『聖アントワヌの誘惑』と対をなす (*faisant la contrepartie*) 作品として着想された。<sup>40)</sup> その『聖アントワヌの誘惑』(初稿)の第2部冒頭は、サタンが率いる七大罪の悪魔によるアントワヌの礼拝堂攻撃の場面である。カトリシズムの未来の栄光を謳ってアントワヌの信仰を支えようとする三対神徳(信仰, 希望, 慈愛)を, 奇声を発しながら揶揄する七大罪の言葉から成っていたその攻撃は, 「論理」そして特に「科学」の登場後には, 三対神徳と悪魔側との神学論争の形をとって一段と深刻さを増し, それに従い悪魔側の驚くべき多弁ぶりに対する三対神徳の寡黙さ, その劣勢がたちまち歴然となって, 結局この場面を最後に三対神徳は作品から姿を消す。一方「科学」(七大罪のひとつ「高慢」の息子とされる, 大きな頭とひ弱な脚を持つ白髪の子供)は, 初稿『誘惑』ではこの礼拝堂攻撃の場面にしか登場しないほとんど挿話的な存在に過ぎないが, 決定稿『誘惑』では, 新たな人物イラリオンが初稿の「科学」とそっくりの姿で第3章で登場して以後, アントワヌの誘惑を構成する幻影のすべては, (少なくとも第5章までは明らかに) この人物の全面的支配下に展開され, そして次第に背丈を伸ばしていった末に, 異教の神々の没落を語る第5章末尾に至って《首天使のように美しく》巨大な姿に変容した彼は, 自らはっきりと「科学」と名乗り, その直後(第6章), 悪魔に変身しアントワヌを翼に乗せて宇宙空間へ飛び立って行く。そして, 第7章末尾で, 昇る日輪に浮かぶキリストの顔に折るアントワヌの姿でやや唐突に作品が終わる直前, 隠者は原始の細胞が振動するのを見て狂喜して叫ぶ——《私は生命の誕生を見たのだ! 運動

40) 1872年7月1日, ジョルジュ・サンド宛。

『ブヴァールとペキュッシュ』を読む (一)

の始まりを見たのだ! (……) 私は飛び、泳ぎ、吠え、唸り、叫びたい。(……) 物質になりたい!」フローベールはある時、《科学的細胞》によってもたらされるアントワヌの《最終的敗北》ということ語った。<sup>41)</sup>『聖アントワヌの誘惑』は、確かに、「科学」の姿をとる悪魔に対する三対神徳すなわちクリスティアニズムの闘争と、その《最終的敗北》のドラマを内包している。

これと《対をなす》作品『ブヴァールとペキュッシュ』の第9章で、前作品のアントワヌ (あるいは三対神徳) の役回りを演ずるのはジュフロワ神父、そして悪魔すなわち「科学」のそれを我らの両主人公が果たす。まさに《笑劇仕立ての》作品にふさわしい設定だ。しかし、我らの滑稽な双頭の悪魔も、数々の失敗を経て今や顕著な知的発達を示しており、《信仰と理性を一致させたい》と願う二人の執拗な追求 (その背後に控えているのは勿論、近代比較宗教学・聖書解釈学・神話学分野の作者自身の該博な知識である) に窮して結局は《そこが神秘なのです》と繰り返すか、あるいは《教会の外に殉教者はいないのです》《教会の外に奇蹟はありません》と教会のドグマに逃げ込む以外に術のない神父に対して、《なるほど、いつも同じ論法ですね。教義は事実に基づき事実は教義に基づくというわけですか》と、教会の教えが含む本質的トートロジーを痛烈に皮肉るまでになっている。カトリシズムからの二人の離反を決定的にするのは、ファヴェルジュ伯爵邸で行われる最後の二度の宗教論争である。(小説中の時は《ちょうどイタリア戦争の最中》つまり1859年5-6月。) そこで扱われるのが、そこからの引用が『愚言集』を大いに賑わすことになるジョゼフ・ド・メストルの著作。ド・メストル思想を体現する伯爵の長広舌——フランス革命の否定、《神なくしては国家なし》《権力のみが科学の危険への批判者》、国家と同様、子供の教育にも必要不可欠な《鉄腕》<sup>42)</sup>、宗教は《奴隷を開放し

41) ゴンケール『日記』, 1871年10月18日。

42) 上記, 注18)

た)<sup>43)</sup>……。これを契機に、ブヴァールはラ・メトリーやドルバックの唯物論・無神論へと回帰し、ペキュッシュェは《政治の方便となりはてた宗教》を捨てた。そして二人は神父に対して、宇宙を飛翔しながらアントワーズに教えを垂れる悪魔とほとんど同じ言葉を使って、科学の発達とともに宗教も変わるべきことを説く。《ブヴァールは、造物主の前でへり下るのに自分もやぶさかではないが、その造物主を人間に見立てることにどうにも我慢がならないのだと言った。人は神の復讐を恐れ、神の栄光のために働く。神はあらゆる徳をそなえ、腕、目、政策、住居すら持っている。「天にましますわれらが父よだなんて、いったいどういうことですか？」ペキュッシュェが言い添えた。「宇宙は拡大され、地球はもうその中心ではなくなりました。地球は、数限りなくある同じような天体の中を動いていて、その多くは地球より大きいのですよ。地球がこうして小さくなったというのは、神についてより崇高な観念があるべきことを示しているのじゃありませんか」だから宗教も変わらなければならない。天国にいる福者たちが、ひたすら観想し歌い、そして地獄の責め苦を上から眺めているというのは、何か子供だました。そもそも、キリスト教のおおもとがリングオだなんて!》この後、フローベール最晩年の深い関心を反映して仏教が言及され、さらに、伯爵邸で巡り合った二人の孤児を両主人公が引き取ることが決まることで次章へ向けての準備がなされて、彼らの興味はすでに「宗教」を離れて次の「教育」へ移っているかのごとくである。しかし、結論を下すことはすべからず避けねばならない。彼らは、近代比較宗教学・聖書批判学が収めた成果を武器に、数千年の歴史に支えられた宗教のドグマと戦った。しかし、この章を除くすべての章で彼らがしてきたことは、まさに《理解不能のこと》を前にしたあらゆる“学”の本質的無力の確認ではなかったのか。この章を締めくくるのは宗教否定の言葉ではない。子供たちを引き取って二人が家に帰ると、新しく雇った白痴の下男マルセルが聖母像に一

43) 『紋切型辞典』“キリスト教”の項。

心に祈っている。《「なんて畜生だ」とブヴァールは言った。「なぜだい？  
彼は今、もし君にも見えたら彼のことが羨ましくなるような世界にいるの  
かも知れないよ。まったく違った二つの世界があるのじゃないかね。推論  
の対象よりも推論の仕方が重要なと同様、何を信じるかなど問題じゃな  
い！ 要は信じることだ」これが、ブヴァールに対するベキュッシュェの反  
駁の言葉であった。》<sup>44)</sup>

---

44) 《私は人生はまったく好きではなく、死もぜんぜん怖くありません。絶対の  
虚無という仮説もまるで恐ろしくないので。黒い大きな穴をめがけて、落  
ち着いた気持ちで身をおどらせる覚悟ができています。とはいえ、私がとり  
わけ惹かれているものは宗教なのです。特定のものではなく、あらゆる宗教  
です。それぞれの宗教のドグマには反感しか覚えませんが、しかしこうした  
宗教を生み出した感情というのは、人間の心の一番自然で詩的なものだ  
と思います。そこに、まやかしと愚かしさしか見なかった哲学者たちはまるで  
気に入りません。私はそこに必然性と本能を見ます。だからキリストのみ心  
のもとにひれ伏すカトリック教徒と同様、偶像に接吻する黒人も大切なもの  
と思っています。》1857年3月30日、ルロワイエ・ド・シャントピー宛。